

言語文化教育研究会 2007 年度前期

連続パネルディスカッション

日本語教育における実践研究とは何か—理論と実践を結ぶ試み

4月20日（金）18：00～20：00

<議事録>

1. 趣旨
2. 質疑応答
3. その他

1. 趣旨

提案趣旨（細川英雄<早稲田大学>＝提案者）：

このパネルの趣旨は、「実践研究」というものの日本語教育における諸問題を整理し、その研究としての位置づけを議論することにある。「実践研究」については、すでに学会研究集会委員会により「実践研究フォーラム」が立ち上げられているが、今回は、この関係者を中心として、「実践研究」の意味と課題について提案するものである。

実践教育現場を第一とする分野でありながら、日本語教育における実践研究とは何かという議論は従来必ずしも十分とはいえなかったことを指摘しつつ、実践研究とは何かという問題について議論を展開する。

以下、パネルの次第は次のとおりである。

「日本語教育における実践研究の実態」（市嶋典子<早稲田大学大学院生>）

実践研究と言った時、抽象論だけではなく、具体的な実践に即した考察をすることによって、その実態が見えてくると考えられる。その際に、どのような実践を行ったのか、実践の内実を明らかにする必要がある。しかし、日本語教育学会発行の「日本語教育」に掲載されてきた論文を概観すると、教室データを用いて書かれた論文が極めて少ないことが分かる。「日本語教育」の中で、どのような実践研究が報告されているのかの調査結果を発表するとともに、日本語教育における実践研究の実態とその問題点を指摘する。

2. 質疑応答

【実践研究におけるデータについて1】

参加者1：実践を目指している論文で完璧なものとして「教育理念、研究目的、教室データ、評価」が揃っているものであるといったが、その中で教室データが無い論文とはどういうものか。

発表者：主に観ると授業が終わった後、学習者のアンケート・ジャーナルで、また、一番多いのはインタビューである。つまり、プロセスより結果を示しているものが多い。特に、プロトコルデータ、実践の中での成果物もさほど多くないし、それを関連付けたものもまったくない。ただ、それは学会紙「日本語教育」に限ったものである。

参加者2：今、学会紙「日本語教育」に限ってといったが、それは「日本語教育」は字数の問題やいろんな制約があるので、大学の記与の方が多いと思う

【実践研究におけるデータについて2】

参加者3：教室のデータを示すというと、授業のやり取りを全部起こした資料が公開されてもいいのかというような感覚で受け止めることがある。ここでいうデータはそうではなく、それをどう活かすかがポイントであると思うが、どういう使い方をしているのか。

発表者：数値やグラフより、授業のどのようなものが起きて、どのようなものが生まれたのかが分かるような生のデータを使っている。それを提示することによって、自分の問題として捉えることも可能ではないかと思うし、教室の中身が伝わってくる。

参加者3：その中では、学習者の発話、表情など具体的なことも反映されるのか。

発表者：論文の主張がより表れるものや実践がどのように行われたのかが大事である。また、データの中で、どこを切り取るのかの問題も大きいと思う。

参加者4：実践データは、結局は実践における教育目的や教育理念の産物だと思う。

発表者：特に、理念と評価の一貫性の問題もあると思う。

参加者5：教室実践の中でデータの記述の仕方について分からないこともある。ただ、実践する人と観察するする人が同じ人であるべきか、別々の人が観察者としていてもいいのかも考えるといい。

発表者：先学期の実践では参与観察者がいて、いろんな考え方もできて現実が見えてくるのかなと思った。現在、先学期行った実践の中で学習者のインタビューをコーディングしたものを何人かの方と一緒に考えている。

【教育観の問題】

- 参加者 2：発表者の実践研究の定義のところと、結論での「教育観」の問題に共感した。つまり、実践を行って振り返るだけだとそれは誰でもやっていると思う。しかし、毎日の振り返りの中でそのつどのもぐらたたき状態になって、なかなか目ターの状態には上がらないと思う。私はその原因が「教育観に基く」ということが欠落しているのではないかと思う。そうすると実践研究のどこに、その部分が反映されるのかを聞きたい。「主体的に」というところなのか。それと「主体的に」という意味が分かりにくかった。
- 発表者： 「主体的に」というところに「教育観」が反映されている。例えば、ある決まった枠組みの中で教室をデザインするのと、逆に教師らがインターアクションをしながら作り上げる教室デザインがあると思う。主体的ということはその後者のやり取りの中で、一人でなく、同僚と一緒に主体的に考えながら教育観を作っていくというイメージを持っている。
- 参加者 2：主体的ではないということは決められた枠組みがあるということなのか。「どのような教育観に基き」というところが「主体的」であることなのか引がかかる。
- 発表者： ただかわり方があると思う。私は「教育観」が大切だといいながら、括弧の「教育観」を持っているのではなくて、実際の活動の中で試行錯誤をしながら、自分の「教育観」を探しているような感じ。そのとき、理論や言説が参考にはするが、それを基に、自分も考えていく。そういう姿勢である。
- 細川：この問題は 7 月に発表される、舘岡先生のことと関係がある。理論があって、実践があるのではなく、実践の中から理論が立ち現れることと関係してくると思う。

【実践＝研究：実践研究 1】

- 参加者 5：実践＝研究のところは共感するが、研究をしない人は教育理念を考えるのではなく、現在の状況で授業をしていることにいっぱいであると思う。
- 細川： そういうことを乗り越えるために、実践＝研究の考え方が必要である。つまり、いい授業をしたいということは誰でも思っている。また、どうしたらいい授業が出来るかも考えると思うが、それがすなわち研究であると考え。従って、研究と実践を分けること自体が非常に問題である。そして、教室活動がどうして、表に出にくいのかを考えることがある。例えば、初級で「テ形」が上手くいったということを書いている実践研究が一本もない。つまり、それを他者に見せることはどんな意味があるかということに、教育関係者が自覚的になっていないのではないかと考える。だから出てこない。そうすると、日本語教育の

目的、教室の目的はいったいなんだろうかということにつながっていくと思う。それを考えるのが、教育理念を考えるのと結びついていて、何のために「テ形」を導入しなければならないのかを考えざるを得なくなる。それがないと、教室実践を他者に示す、見せ合うという意志が内発的に動いてこないのではないかなと思う。それが、実践研究が少ない理由ではないか。

参加者6：では、自分が行った実践を誰に見せ合うのかの問題もあると思う。いい授業というのは、自分の授業と他の先生の授業との関係の中でのいい授業である（どんなことがおきたのかを話し合うこと）。そうすると、他人に実践を見せ合うことになると思う。そういう意味で、実践研究になると思う。しかし、見せる相手と同じ同僚で十分であるとそれで終わってしまうと思うが、自分の実践を知らない人にも見せることがあって、そういう意味で、誰に見せることがあるのではないかと思う。

細川：それは同僚に見せることが第一歩だと思う。もうすでに実践研究が始まっていると思う。でも、それを論文に書いたり、研究発表をすることは不特定多数に向けてすることで、教室を開くという意味になると思う。そして、それは自分の実践の振り返りにもなるのではないかと考える。その循環こそが重要であるが、何があっても論文書かなければならないとかではなく、地道にやっていくのが大事である。

参加者6：そうすると、研究という名がついてしまうと、論文というイメージが強い。細川先生の話の踏まえると、実践＝研究というのはいろんな形があって行われている。それを考えていかないと、そのように誤解が生まれる可能性があると思う。

細川：だから、同僚たちのおしゃべりから対外に向けてまでの循環を日本語教師が意識的にならないことが大事あると考えているし必要である。

参加者7：今の問題はいろんな問題が複数絡みあっていると思っている。まずは、教育理念のことが一番問題で、理念がないのではなくて、非常に自明になっていること。それが実践研究の問題なのか、それとも、日本語教育全体の問題なのかを疑う必要がある。そして、実践研究が日本語教育に上がってこないのは、もっと別の問題があつて、実践研究の方法論や意義がまだ定まっていないという問題があるのではないか。

発表者：私も日本語教育は自明から始まっていて必然性があまり見えないことに対して共感できる。だから、大きな流れの中で、自分がここに注目してここを取り入れながら、実践を考えていく。実践を考えながら知見を考えていくような感じでやっている。

【実践＝研究：実践研究2】

参加者8：教育理念や教育目的は現場の教師でも持っていて、話し合うことによって自分のクラスを変えていくことはしていると思う。しかし、やはり問題になるのは実践と研究がかけ離れていることではないか。

発表者：特に問題なのは、論文や文献を読むだけで非常に難しい。

参加者8：直接は役に立たないことは思ったことがある。

参加者9：自分の実践を同僚に見せることと関係があるが、その際に、「自明なこと」が当たり前のことであるけど、研究理念なのでもって行こうとすると時間がない。だから、自分の実践を文章化する意味という点で、それを他の人に見てもらおうようにする形も一つあるかなと思う。実際、そこからフィードバックをもらったこともある。また発表で実践研究のポイントが絞られていたのだが、逆にそうすることによって、可能性が無くなっていく印象ではないかと思う。

発表者：私もそうと思いますが、今回はこの4点を問題にしたかったこともあるので、持ち出した。もっと具体的に読み込んでいくことも必要であると思う。

参加者11：ここで言っている「研究」は既存言われていた「研究」を踏みつけるような形で出ていると思う。また、たぶん大学が一番実践研究やってないのではないかと思う。その意味をちゃんと分かり合ったり、それによる教室活動を組んでいるかとしたら、私は分からない。また、大学が一番閉じていると考えられる。私はもう一つの現場を持っているが、そっちの方がもっとフリーである。それはそこにいる学生のため。それと、大学の側と分かり合うためには、一緒に協働しないとイケないと思う。それから、同僚たちと実践について話していることが、そのまま流れてしまって、内省や記述に深まらないのが問題だと思っている。

発表者：活動の記録の話しだが、記述したものを人に見てもらって、話し合いができればと思うし。それを他の人に見せることで協働が生まれるし、それがつながっていくことで大きなものになると考えている。

参加者2：最初の話とつながるが、みんなに教育観が存在すると思うが、それに無自覚で見せる、話すことができないのではないか。だから、日常的に活動はしているのだが、それ中にある「教育観」に気づいていないのが問題であると考え。それが出来るからこそ開かれる教室になると思う。

【おわりの言葉】

細川：「実践研究」という言葉を使い始めたのはごく最近である。ところが、「実践研究」という言葉は一般的ではないし、理論的に説明することでかなり試行錯誤してきた。考えているうちに、実践と理論の統合と言っているが、それが実践と研究を

別のものだと考えているところに一番問題があるのではないかと。研究に対するイメージというのは一人一人違っているし、その人のポジションによって、研究はこういうものと思い込んでいるし、その用語イメージが非常にばらばらだということに気がついた。それを解体しないと解決できないと思って、「実践＝研究」を考えた。そうすることによって、研究、実践に対するコンプレックスがよく見えてきて、それを一つにして、いい仕事をするのが、実践であり、研究だとなんでもないが、それがどうして、二項対立が起こるのかということを開いていかないと、だまだと思った。今は、逆に言うと、今の研究科のモットーは「理論と研究の統合」なんですけど、自己矛盾に陥りかけている。結局、理論と実践とか実践と研究のように分けて考えるのは、もうだめかなと思う。それをどうやって乗り越えていくかという問題である。同僚たちのおしゃべりから、その道のりが日本語教師の人生の中で、循環がうまくつながっていくようなことができれば、日本語教育の世界も明るくなるのではないかなと思う。

3. その他

- ・連絡事項、次回の開催について

以上，記録：金相郁